

T-16番 要約

1 被害者

住所地 北海道恵庭市

保護者 金澤千世（母）全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会北海道支部副代表

本人 平成8年生 接種時中学3年（15歳） 現在17歳

2 接種前

健康・中学3年 テニス部で活躍

3 接種 サーバリックス（2011年9月1日、10月6日、2012年3月19日）

4 経過概要

2011年 恵庭市から学校経由で手紙一年度内なら無償

9月 1日 1回目 痛みもはれもなし

10月 6日 2回目 激しい頭痛、倦怠感、脚のむずむず、夜尿

2012年

3月19日 3回目 光がまぶしいことが加わる

4月 看護学校入学、めまい、耳鳴り、眼球が振り子のように振れるなど

2013年

7月 部活動の途中でラケットを握る右手に突然けいれん

以後 過呼吸、動機、歩行困難、不随運動、吐き気、脱力、睡眠障害、舌根沈下

10月 母が受診した婦人科で初めてワクチンの関連性指摘される

「みかりん」のブログをみて被害者連絡会に電話して確信をもつ

11月 無念の休学、硬直がひどくなる

2014年

4月 通信制高校入学、呼吸が止まる、記憶障害

5 受診医療機関

13の医療機関を受診。

札幌医科大学では「動画をみてまねしている」「演技している」「親が騒ぐから治らない」等と詐病扱いされ、本人のトラウマになる

MR I画像で海馬萎縮

髄液検査で辺縁系脳炎と診断

6 申請

特別児童扶養手当2級の認定

T-16番 母 金澤 千世（北海道恵庭市）

1 接種前

私は、恵庭市に住む17歳の娘（平成8年生まれ）の母です。

娘が子宮頸がんワクチンの副反応の被害を受けています。

娘は子宮頸がんワクチンを接種する前は、何の病気もなく、健康で、中学ではテニス部で活躍していました。

2 接種のきっかけ

娘が子宮頸がんワクチンであるサーバリックスを接種したのは、中学3年生だった2011年9月1日、10月6日、2012年3月19日の3回です。

きっかけは、当時娘が通っていた中学校から生徒全員に配布された手紙でした。手紙には、子宮頸がんの予防のため、ワクチンを接種することを勧めるとあり、年度内なら無償だと書かれていました。この頃は、まだ定期接種ではありませんでしたが、公費負担で接種ができるようになっており、無償のうちに受けなければと思い、迷わず接種を受けることにしました。娘も友人が皆受けていたので、受けなければと思っていたようです。

3 接種前の説明

ワクチンの接種は3回とも、最寄りの医療機関で受けました。

接種に当たっては、事前に説明文書と承諾書が送付されてきました。この中には、製薬企業が作成したパンフレットのようなものも入っていましたが、接種当日、医師から改めて説明を受けるということはありませんでした。

このワクチンを接種するときには、これを打てば、将来子宮頸がんにならないのだと思っていましたし、重い副作用が出ることも知りませんでした。子宮頸がんの原因ウイルスのうち半分の型にしか効かないとか、子宮頸がんを防ぐということは証明されていないということなどは思ってもみなかったのです。

既にワクチンを受けた娘の友人たちが、とても痛かったとか、接種したところが腫れたということを書いていましたので、そうならないといいねとは話していました。

4 第2回目の接種後の頭痛、倦怠感、むずむず、夜尿

2011年9月1日の第1回目の接種のときは、痛みもなく、接種部位が腫れることもありませんでした。

ところが、2011年10月6日の第2回目の接種後、しばらくして、娘は、頭が痛く、体がだるいと訴えるようになりました。そして、さらに、脚がむずむずするという症状も加わるようになりました。頭痛もひどくなる一方で、それは、頭をガンガンとたたかかれているような、今まで経験したことのないような痛みだと言います。そこで、10月28日、市内の病院の小児科を受診させましたが、頭痛は肩こりが原因と言われました。私も娘も、頭痛やだるさがワクチンのせいだとは思っておらず、医師からもその指摘はありませんでした。そこで、リンパマッサージを受けたりしました。娘が黙っていたので、後で知りましたが、2回目の接種後、夜尿もでていました。

5 第3回目の接種と光過敏

2012年3月、娘は、看護師になるため、頭痛や体調の悪さに耐えて、5年制の高校を受験し、みごと合格しました。

そして、3月19日、受験が終わるまではと控えていた3回目のワクチン接種をしたのです。娘の体の異変がワクチンのせいだとは露も疑っていませんでした。

そして、この接種の後、すぐに娘は光りがまぶしいと言いました。カーテンが開いているだけでも目が潰されるように感じるとのことでした。

それでも娘は、4月から看護学校に通学を始めました。北海道には看護学校は2校しかありません。合格した看護学校は自宅からは通えない距離でしたので、娘は学校の近くで下宿生活を始めました。途切れることのない頭痛を抑えるため、市販の頭痛薬を飲み続け、倦怠感のために気がつくと言っているという生活だったとのことでした。夜尿症も続いています。

6 めまい、耳鳴り

娘のさらなる異変に気がついたのは、2012年4月の授業参観のときです。体育の授業参観で後ろ走りの競技のとき、娘の走り方が不自然で、一人だけ遅くおかしかったのです。運動の得意な娘には考えられないことでした。脚の筋肉に異常が出ていたのだと思います。

2013年3月15日には、学校から娘の具合が悪いので迎えに来てほしいという連絡があり、駆けつけると、真っ青な顔をした娘が保健室にいました。激しいめまいと耳鳴りで、まっすぐものを見るのが難しい様子で、目をのぞき込んでみると、黒目が左右振り子のように揺れていました。

翌日、耳鼻科医を受診したところ、メニエール病と診断されましたが、3月22日には別の耳鼻科でメニエール病ではないと言われました。そして、脳に異常があるかもしれないということで、脳神経外科を紹介されました。脳神経外科ではMRI検査をしましたが、異常はないと言われました。

その後、娘のめまいと耳鳴りは悪化の一途をたどり、娘は登校していても保健室で過ごすことが多くなっていきました。

7 けいれん

2013年の7月23日、娘にさらに新しい症状が加わりました。部活動の途中でラケットを握っていた右手に力が入らなくなってきたと思ったら、手からラケットが落ち、けいれんが始まったのです。娘は最初の病院で対応できず、次の病院で点滴を受け、結局午後4時から始まったけいれんは午後9時になってようやく治まりました。途中で手が痛くなったが止めることができなかったと言っていました。この後、娘は、それまでの症状に加え、けいれんにも悩まされることになったのです。

8 過呼吸、嘔吐、麻痺、歩行困難と休学

2013年8月21日、娘は学校で友人と話しているとき突然過呼吸になりました。息が吸えず、けいれんが起き、脚がわなわなする不随意運動が始まりました。

この後、胸と背中がひどくなり、痛みをやわらげるため、カエルのぬいぐるみを抱きながら学校に通いました。これで胸が圧迫されるので少し楽になるのです。

看護学校ですから、実習もあり、そう欠席もできません。それで、9月からは、針治療を受けたり、電気治療を受けたりしました。しかし、いずれも一時はよくてもすぐに効果がなくなります。診療内科で、抗精神薬パキシルの処方を受けましたが、飲むと急にうれしくなったり、泣きたくなったりするので、やめました。こうしていろいろな治療を受けながら必死に学校に通いました。

しかし、9月30日、嘔吐して麻痺が始まり、とうとう歩けなくなり、あんなに楽しみにしていた10月2日からの修学旅行にいけないことになってしまいました。娘はつらくて、「もうこんな体いらない、消してほしい。」と泣いていました。

10月10日には、担任の先生から、単位不足となる可能性を指摘されました。看護学校だったので、先生方も友達も娘の病状をよく理解して応援してくれたのですが、欠席が重なりすぎたのです。

そして、10月15日、学校に呼ばれて駆けつけると、保健室でけいれんを起こしている娘がいました。痛み、けいれん、過呼吸発作、歩行困難など次々と襲ってくる症状に耐えて、がんばって、がんばって学校に通い続けてきた娘でしたが、私はこの娘の姿をみて、もうこれ以上は無理だと悟りました。私も担任の先生も「ここまでよくがんばったよ。」と言ってやりました。娘にはその意味が分かっていて、涙をこぼしていました。

9 硬直と「消して、消して」

休学となり、下宿を引き払い、自宅に戻った娘の症状はさらに悪化し、硬直もよく出るようになっていました。硬直が起きると、たとえば、右手の中指と親指を握ったまま固まってしまい、自分はもちろん、親が広げようとしても固くてできないというような状態になります。また、足は棒のようにピンとつっぱってしまいます。硬直は、手、足だけでなく、舌にもでて、舌が喉の奥に吸い込まれるのではないかと思うくらいに巻かれてしまい、皆で慌てて引っ張りだしたということもありました。

少し調子がよくて動くと、その反動で翌日はけいれんや硬直が強くて、ぐったりと一日寝ていなければなりません。家に遊びに来ていた3歳のいとこの面倒をみて遊んでやった後、激しいけいれんと硬直がおき、3歳のいとこの言っていることも理解できなくなりました。そして、足がむずむずする、腰から下が自分のものでない感じなどと訴えることも多くなりました。

こういうとき、娘は家族に、腰や太ももを押してくれと言います。それで、夫がもうこれ以上強く押せないというくらいに押してやったり、筋肉をゴリゴリと強くもんでやったりすると、だんだん感覚がもどってきて楽になるということが繰り返しおきました。そういうことが始まると2～3時間続くこともよくありました。

四六時中頭の中がガンガンし、自分の意思とは関係なく、しびれたり、つっぱったり、感覚がなくなったりするのが、よほどつらかったのだと思います。自分で自分をたたき、「消して、消して」と言ったり、「こんな体はいらない」と言ったりすることもあり、見ていただけませんでした。

10 子宮頸がんワクチンの副反応と気がつく

私たちがこういう娘の症状が子宮頸がんワクチンのせいだと知ったのは、10月17日のことでした。

娘に次々と遅いかかる症状に私自身も精神的に限界を感じ、近くの婦人科にかかったと

きに、私は抗精神薬の処方をお願いしました。すると、医師から事情を尋ねられ、娘のことを話したところ、娘の症状は子宮頸がんワクチンのせいではないかと指摘を受けたのです。

それで、びっくりして、インターネットで調べ、被害者の会の代表の松藤さんのブログに行き着いたのです。そして、10月27日、被害者連絡会の池田事務局長にも連絡し、話をしてみても、娘の症状は間違いなく子宮頸がんワクチンの副作用だと分かりました。池田さんから「こういう症状は出ていないか」と言われることがみな当てはまったのです。

1.1 拠点病院での「詐病」扱い

昨年、11月19日、最寄り病院で紹介状をもらい、厚生労働省の研究班の拠点病院である札幌医科大学リハビリテーション科を受診しました。

この病院を受診するまでに受診した病院は既に10を数えていました。それで、受診する前は、やっとたどり着いた専門の医師の元で、治療を受けられると期待しました。しかし、その期待は裏切られてしまいました。

私としては神経内科とリハビリテーション科の両方を受診したかったのですが、神経内科の受診はできない、リハビリテーション科を受診するように言われました。そして、リハビリテーション科では、診察前に20枚にもなるアンケート用紙に本人が記入することを求められました。この日娘は麻痺がでていて車いすでの受診で、文字を書くことが大変でした。それでペンを右と左と何度も持ち替えて少しずつ記入し、とても時間がかかりました。

そして、いよいよ診察となったとき、医師は、「病気ではないので検査はいらない。子宮頸がんワクチンについてはよく分かっていない。リハビリを受けたければ受けてもいい」と突き放すように言ったのです。私は検査をしてほしいと食い下がり、ようやく神経内科への紹介状を書いてもらいました。

ところが、11月26日、その紹介状をもって札幌医大の神経内科を受診すると、車椅子にのって麻痺を起こしている娘をみて、「これは神経内科的症状ではない。きれいじゃない。子宮頸がんのワクチンの副作用という動画を見てまねしている。」「演技しているだけ。」というのです。そして、私に「親が騒ぐから治らない。」「副作用と言って騒いでいる人たちの半分はそうです。」「検査していいの。検査して異常なしと言われて困るのはお嬢さんですよ。」と言ったのです。私も娘も、詐病扱いされて、悔しさが言葉がでませんでした。そして、後で、2人で泣きました。

私たちは、つい最近までワクチンのせいだとは露も思っていなかったのです。それでも娘の症状は進みました。そして、娘は本当に必死で学校に通ったのです。どれほど治したいと思ひ、どれほど学校に通い続けたいと思っただけでがんばったか。それは家族だけではなく、学校の先生方も友人も皆知っています。それを、短時間の診察で詐病と決めつけるのが、拠点病院だとは信じられませんでした。

その後、途方に暮れた私は、以前に精神科を受診するようにと指導した医療機関に、改めてワクチンの副反応ではないかと思うので、それを前提にみてほしいと言って診察を受けましたが、「なんで俺の言っているところ（精神科）に行かないんだ。」と怒鳴られました。

1.2 通信制高校への入学、呼吸が止まる、記憶がなくなる

その後、ようやく親身になって話を聞いてくれる医療機関で治療を受けられるようになりました。MRIをとったところ、左の海馬が萎縮しているとのこと。また、髄液検査をしたところ、辺縁系脳炎の疑いがあるという検査結果が出ております。また、特別児童扶養手当2級と認定されました。

娘は、4月から通信制の高校に入学しました。スクーリングもあります。夢だった看護師はむずかしくても、何か資格をとりたいとがんばって通い、レポートも出しています。

けれども、また新しい症状が娘を襲っています。息が止まるのです。過呼吸とは違います。たたいたり、さすったりするとフッと息をしますが、その後また止まってしまうということを繰り返します。そして、のどがげいれんしたりします。脱力もよく起きます。脱力のときは、トイレにも引きずって行って便座に座らせなければならないのですが、私の力では本当に大変です。そして、これがある瞬間ケロッと治るのです。

5月に入ってから、記憶がなくなるという症状もでています。5月13日下校途中、足が動かなくなってきたと本人から連絡があり、迎えに行くと地下の遊歩道で動けなくなっていて、学校の先生も駆けつけていました。そして、その日から、明らかに、意識がどこか違うところに行ってしまうという顔つきが現れ、自分の家のトイレの場所も分からず、くだものを食べても「これ何？」と名前を聞くといったことが起きるようになったのです。記憶も混乱し、まだ看護学校に通っているかのように話します。私は、違う世界に行ってしまう娘に戻ってきてほしいという思いで、辛抱強く話しかけて思い出させるようにしています。

先日、娘の親しい友人から、以前娘が「いつか記憶がなくなっちゃうかもしれないから、今のうちに楽しんでおかないとね。」と話していたということを知りました。進行する症状にどんな思いで過ごしていたのかと思うと涙がでます。

13 終わりに

2014年2月21日、全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会北海道支部を立ち上げて記者会見を行い、私は副代表として実名を公表しました。実名公表には躊躇がありました。実名を出すことで少しでも真剣に受け止めてもらえると思ったからです。

娘は、看護師になることを夢見て本当にがんばってきたのですが、それをあきらめなければなりません。残念でなりません。

私たちは、子宮頸がんワクチンのことについては十分に知らされていませんでした。こんな副作用があると知っていたら、接種はさせませんでした。

娘も私たち家族も、私たちと同じ思いをする人をこれ以上出してほしくはありません。定期接種は中止してください。そして既に被害にあって苦しんでいる被害者のために、治療方法の開発と安心して受診できる医療機関を整備してください。

娘は、結局13の医療機関を受診しました。針治療や電気治療も含めればさらに増えます。患者に思いやりのある接し方ができない医療機関を拠点病院とするべきではありません。

そして、経済的な支援を是非ともお願いします。